

-197- 慢性肝炎, 肝硬変から原発性肝癌の発生を
核医学的検査法によって追跡した12症例の検討

岐阜大 放

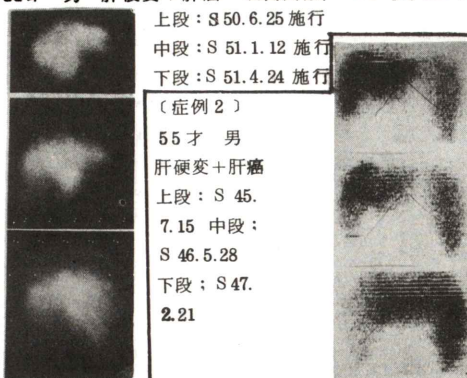
○今枝孟義, 仙田宏平, 加野敏光,
浅田修市, 土井偉誉

慢性肝炎, 肝硬変であることを確認し, その後の経過観察中に原発性肝癌の発生を追跡した12症例につき肝シンチなどの核医学的検査法によって検討を加えたので報告する。

対象症例 12例の肝癌発見時の年齢分布は 46才から 72才までで, その平均年齢は 60.4才であった。性別は男 11例, 女 1例であった。慢性肝炎, 肝硬変と診断されてから肝癌が発見されるまでの期間は最短 1年 7ヶ月から最長 8年 6ヶ月(O, H. の例)の間にあり, その平均発生期間は 3年 3ヶ月であった。HBs抗原(RIA法)は 4例が持続陽性, 8例が持続陰性で, 一方HBs抗体(RIA法)は 5例が持続陽性で, 7例が持続陰性であり, 両者共に陰性が 3例あった。肝癌発見時の最高 AFP値(RIA法)は 10例が 10^3 ng/ml 以上であり, 残りは 375 ng/ml と 20 ng/ml 以下であった。経過観察中の AFPの変動は初め 20 ng/ml 以下であるが, 経過と共に数ヶ月間 100 ng/ml 程度を維持し, その後 10^3 ng/ml 以上の高値を示した。肝シンチでの経過観察で欠損像を指摘しえてからの腫瘍は急激にその大きさを増大し, ほとんど 6ヵ月以内に死亡した。肝癌発生部位は 10例が右葉に, 残り 2例は左葉に最初発見された。欠損像の数は 2個以上のものが 5例で, 単発性が 7例であった。肝硬変の組織像はすべて Z型(三宅分類)で, 慢性肝炎は活動型であった。基礎疾患に肝硬変があることもあって, すべての症例が手術不可能であった。AFP による肝癌の早期診断には問題が残るも, 肝硬変の経過観察中に陽性化, 急激な AFP値の上昇を認めたときは肝癌の発生を疑ってもよい結果であった。しかし, 今後更に肝癌発生の早期診断法の改善, 開発が望まれる。

(症例供覧) (症例 1)

58才 男 肝硬変+肝癌 右側面像(^{99m}Tc -phytate)



-198- 二核種使用による肝シンチグラムの
臨床的検討

大阪医大 放

○河合 武司, 新宅 敬夫
長島 功, 種子田秀樹
小川 翼, 赤木 弘昭

[目的]

二核種使用による肝シンチグラムを臨床的に検討し, その成績を報告する。

[方法]

二種類の R I、 ^{67}Ga -citrate と ^{198}Au -colloid を組合せ, 前者は 2 日前に 2 mCi を後者は検査直前に 300uCi を静注した。

測定は, エネルギーピークの異つた二種類の R I をアナライザー 2 個をとりつけたガンマカメラ(ニュークリアシカゴ社製 H P・6406 型)によつて同時測定し, 中央演算処理装置(NOVA・001 型, 16K 語)を介して, 記憶型ブラウン管表示装置へ上, 下二段で経時的に表示しながら記憶させ, データ保存の為磁気テープに記録した。

データ処理は, 中央演算処理装置にて減算処理, バックグラウンド処理を行い病巣部を陽性像として描画した。

対象は, 一核種による肝シンチグラムと, 臨床所見, その他の所見から腫瘍を疑つた症例について, 二核種による肝シンチグラムを実施した。

[結果]

二核種による肝シンチグラムを実施した 45 例中, 一核種のための像で Space Occupying Lesion と読影出来たのは 24 例(53.3%), S.O.L. が読影困難であつたのは 21 例(46.7%)であつた。前者の内 3 例(6.7%)が二核種で腫瘍を否定され, 1 症例はのう胞であつた。後者の内 5 例(11.1%)が二核種で陽性像を得た。

[結論]

一核種による肝シンチグラムで S.O.L. が読影出来なかつた症例で二核種による肝シンチグラムで陽性像を得たのが 5 例あり, 一核種による S.O.L. を否定したのは 3 例あり, 臨床上有意義な結果を得た。